様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６６５９

研究課題名（和文）アフリカ美術におけるキリスト教的図像：フランス人宣教師から見た彫刻表現

研究課題名（英文）Christianity and the French Missionaries in African Arts

研究代表者
柳沢　史明（YANAGISAWA, Fumiaki）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教

研究者番号：１０７２５７３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は植民地期のサハラ以南アフリカにおけるキリスト教布教びそれに伴う当地の宗教表現を芸術を介して考察した。研究をすすめるにあたり、1)植民地支配に伴う宣教師ら（アフリカ宣教会等）の文明化の理論と「偶像」「呪物」の収集・展示に関する資料分析、2)植民地状況下のアフリカ芸術の創造と支援に従事する宣教会の植民地（主義）的役割とそれを後押しする行政のロジックの分析を行った。これらの分析を通して、アフリカ芸術の「発見」を取り巻く言説を宗主国フランスにおけるライシテの動向と結びつけることが可能となり、アフリカ美術史の新たな領域の提示と隣接諸分野との連携可能性とを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：We examined colonial sub-Saharan african arts with the propagation of christianism and the representaion of local religions from the late 19th century to early 20th century. For this purpose, series of studies were carried out : (1) analysis of civilization theories by missionaries (ex. Societe des missions africains) involved in the french colonisation, and of process of the collection and the exposition of ''idoles'', ''fetish'' and other african objects, (2) analysis of colonial(ist) role of missionary involved in the invention and the support of african arts in colonised Africa, and of french administrative logic backing this kind of missionary activity. Through these analyses, we could present new fields of african arts studies and the connectivity with related disciplines, in linking discourses about african arts ''discovered'' at that time to the french tendency toward the secularism.

研究分野：芸術学

キーワード：アフリカ美術　植民地主義　フランス　カトリック海外布教　芸術学　宣教師　アフリカ宣教会　ベナン

１．研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、フランスにおけるアフリカ彫刻の受容に関して、美学、文化政治史の観点から考察し、「民族誌的器物」ないし「偶像」が「芸術(芸術作品)」へと評価が転じた際に生じた様々な波及効果について研究を進めてきた。その過程で、アフリカ芸術における植民地行政の役割については関心を払っていたものの、当地の芸術制作や芸術実践におけるキリスト教宣教師らの役割に関して十分な考察を加えてこなかったことが明らかとなった。そこで、狭義のフランス美術界あるいは人類学研究といった諸学問との部分的に交わりつつも、当時のフランス政府とは政治的・社会的に曖昧な関係にあったカトリック宣教師らのアフリカ芸術観に着目することにした。こうした主題は、アフリカ芸術におけるモダニズムの実態のみならず、植民地文化の変容や植民地行政における芸術の役割、さらにはライシテ時代の植民地におけるキリスト教の分析にまで射程を伸ばす研究として発案実施された。

２．研究の目的

本研究の当初の目的は大分して二つあり、一つには、アフリカ彫刻に対する宣教師らの見解とキリスト教伝播の言説を分析し、彼らが現地のキリスト教にまつわる彫刻制作にどのような思想的･図像的指示を行い、評価を下していたかを考察することにある。もう一つは､キリスト教的図像を含んだ｢コロン」と呼ばれる西洋人表象が、アフリカ美術研究史においてどのように位置づけられてきたかを再構成することに求められた。

アフリカ植民地化の過程にて、「文明化の使命」と並行して進められたキリスト教の伝播は、アフリカ社会が宗教および芸術の領域において大きな変化を被った契機となっている。具体的には、それまで当地の宗教的文脈・制度のなかで実践されてきた彫刻制作に加え、カトリックの司祭の像や磔刑のキリスト像、教会を彩る装飾等が新たな彫刻として制作され始めることになる。こうした事例は、フランスのキリスト教使節団(主にカトリック系だがプロテスタント系の使節団もアフリカで布教を行っている)がアフリカのコミュニティにキリスト教を根付かせようとする意図や方策と、当地の西洋人表象及び彫像製作との折衝を如実に現す格好の事例であろう。植民地化以後、どのような形態的特徴を伴って、キリスト教の要素がアフリカ彫像に現れたのか、そしてキリスト教使節団らがどの程度こうした彫像製作に関与していたのか、またこうした彫像に対し本国の美術批評家、民族学者らはどのような反応を示したのかを明らかにすることが本研究の目的となる。

３．研究の方法

本研究にとって差し当たり重要なのは、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて制作された「コロン」のような西洋人を模した彫像をめぐる言説史の構築、及びフランスキリスト教宣教師のアフリカでの活動に関する歴史研究である。この点に関して問われるべきは、キリスト教宣教師が具体的にどのような布教を行ったのか、またその際に彫像製作に関する指示、例えばキリストの像をはじめとする儀礼用の彫像や、司祭を象った西洋人を模した像を製作する際に具体的な指示があったのか否かという歴史的な実証作業であろう。そこで、キリスト教宣教師の文書資料を収集、整理、分析するにあたって、フランスのリヨンのアフリカ博物館(Musée africain, Lyon)及び博物館を運営するアフリカ宣教会のアーカイブを主たる研究対象とした。2016 年及び 2017 年にリヨンのアフリカ博物館及びローマのアフリカ宣教会(Société des missions africaines, SMA)本部を訪問し、宣教会が発行に関与していたカタログ、雑誌類（*L'Echo des missions africaines, La reconnaissance Africaine, Phare du Dahomey* など）の諸テクスト、博物館や展覧会の写真を渉猟した。また先行研究（フランス植民地主義、アフリカへのカトリック宣教、アフリカ芸術に関するものなど）を収集・分析するとともに、具体的な研究対象地域としてフランス領西アフリカを構成していた国であり SMA の派遣地域であったベナン（ダオメ）に焦点をあて、19 世紀後半の「偶像」「呪物」の表象を雑誌類や展示風景（アフリカ宣教会運営の博物館及びリヨン万国博覧会）から再構成するとともにその言説を社会学的観点及び植民地主義的文脈から考察した。また 20 世紀初頭のアフリカ造形物をめぐる美的価値の転換以降の宣教会の展示・収集活動の内実を辿ることで、転換以前以降の宣教会・宣教師らのアフリカ観、さらには植民地事業全般におけるアフリカ文化のあり方とキリスト教との結びつきに関する分析を進めた。

上述してきたアフリカ芸術―カトリック宣教会―植民地主義という当研究諸主題は、日本では資料収集が難しいのと同時に、専門家が少ないという困難に直面することが予想された。そこで、海外調査の折にフランスの専門家（リヨン＝リュミエール第二大学 L. ゼルビニ准教授）や SMA のアーキビストらと研究上の打合せを行い、資料の所在のみならず研究方針等に関する議論を交換し、本研究を進めた。

４．研究成果

初年度は主にフランス人宣教師によるアフリカ文化の報告書、論文等の精査および関連する先行研究をもとに、西アフリカ社会における「呪物(フェティシュ)」と彫刻をめぐる議論を精査した。一八世紀後半のCh.ド・ブロスのフェティシズム論を端緒に、民族誌的視点が芽生え始める一九世紀（N・ボーダン)、さらに民族誌的考察の実践を行い始める一九二〇年代の宣教師ら（F・オピエ）の活動を追うことで、アフリカ彫刻がカトリック宣教師らのなかで文化的に評価される過程、及び展示へと至る過程を明らかにした。とりわけ一九世紀半ばリヨンに拠点を築いた「アフリカ宣教会」に着目し、団体の設立や博物館開館の経緯を調べると同時に、歴代の宣教師らのアフリカ文化観ないし彫刻観の比較、考察を行った。その際、一九世紀末にフランスの植民地政策及び大衆文化においてとりわけ関心の高かったダオメ(現ベナン共和国)に関心を払い、同時期の彫刻展示（博物館展示ないし植民地博覧会でのパヴィリオン展示）に関する分析も進めた（主に学会発表④で研究成果を発表した)。

初年度の研究を進めるにあたり、本研究課題の目的の第一点目、キリスト教宣教とアフリカ彫刻との関係性が、当初の予定以上に錯綜したものであることが徐々に判明してきた。とりわけ19世紀後半から20世紀初頭にかけて進められたアフリカ宣教会のアフリカへのキリスト教布教は、19世紀フランスにおける「ライシテ」と呼ばれる動向を無視して考察を進められないことが判明した。たとえば、この時期における万国博覧会におけるキリスト教パヴィリオンの役割や宣教師らの海外活動に関する宣伝等は、19世紀来の反教権主義やライシテの動向と深く関わり、当時のキリスト教の存在意義を広く公衆へと訴えかける性格を有していたことが上述してきた研究過程から判明してきた。

そのため、2016年度以降は目的の第一点目に焦点をあて研究を進めることにした。具体的にはアフリカ宣教会の本部に併設された展示区域の変遷、1894年リヨン万国・植民地博覧会での同協会のパヴィリオン、第一次大戦後の展示区域の再編等に着目し、宣教師らによるアフリカ文化表象の変遷を再構成する作業に努めた。とりわけ、同協会が発行していた雑誌(*Echo des Missions Africaine, Frere d'armes*)等を用い、1920年、1933年の博物館再編時における展示内容を分析できたことは本研究にとって有意義であった。というのも、これらの資料を通じて、仮面や宗教的彫刻類を重視する当時のパリの美術界とは異なる展示構成が宣教会の展示に見られたからである。

また、20年代後半における同協会所属F.オピエのダオメ装飾芸術展についても分析を進め、フランス各地を巡回した同展覧会の美術評、展覧会資料の渉猟を行った。オピエ本人の見解のみならず、その友人であった G.アルディ植民地学校校長の見解との対比等を通じ、植民地行政と植民地地域へのキリスト教布教との文化的側面における密接な連携を考察することができた（主に雑誌論文①で研究成果を発表した)。

これらの作業を通じ、カトリックの海外布教と民族学的展示についても派生的に分析する機会があり、バチカンの民族学博物館初代館長も努めた民族誌家 W.シュミットの役割についても考察の端緒を得ることができた。

最終年度は前年度までに渉猟した資料の分析とそれにもとづく研究発表を行った。オピエの友人であり、フランス植民地行政高官 G・アルディの1920年代から30年代にかけての諸論文、会議録、著書等を中心に考察を進め、仏領西アフリカにおける文化変容をめぐる言説とそこに作用する家父長主義的かつ地方尊重主義的文化行政観を、ダオメの新たな彫像文化の現れを例に分析を進め、植民地時代のダオメにおける真鍮製彫像の登場と（非）宗教的彫像の文化的役割を明らかにした。前年度に引き続き、宣教師 F・オピエに関する分析も行い、植民地地域の宗教と芸術の「保存」と「変容」を、ライシテ時代の植民地地域におけるカトリック布教も視野に入れた考察としてまとめた。

最終年度ということもあり、本研究を同時代のフランスとアフリカの植民地主義的関係だけでなくライシテの成立との関わりという観点から日仏シンポジウム（Afrique, catholicisme, et relativisme culturel: parcours des esprits pré-modernes à l'ère laïque）を開催し（科研費16K13161との共催：国内研究者6名、国外研究者2名が発表・討議)、政治的・文化的コンテクストを踏まえた趣旨説明および上述の研究成果を公表した。来日予定だったゼルビニ准教授は体調不良のためシンポジウム参加が取りやめになったものの、フランス語発表原稿及びパワーポイントデータをお送りいただいていたので当日通訳担当者がパワーポイントを用いつつ代読を行った。また、ゼルビニ准教授から一部の登壇者の仏語原稿に対して丁寧かつ有益なコメントを寄せていただき、本人の参加と比して遜色のないシンポジウムを開催できたものと考えている。なお、同シンポジウムでの発表を踏まえた論集が2018年度中に公刊予定である。

本研究はアフリカ芸術の変容を主題としつつも、植民地文化のダイナミクス、植民地行政理論の分析、ライシテ時代の海外布教等を視野に入れたこれまでにないアフリカ芸術研究を実施できたと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）
①柳沢　史明、フランス人宣教師らが見たアフリカの〈呪物〉と〈芸術〉――アフリカ宣教会とダオメ、民族藝術、33 号、査読有、2017、pp. 39-45

②Fumiaki YANAGISAWA, La naissance du tableau en Afrique noire: Kalifala Sidibé et l'« art nègre », Aesthetics, No. 20, 査読有、2016, pp. 38-49

③ Fumiaki YANAGISAWA, Représentations des Noirs à travers le « rythme » : les images panafricaines apportées par les « arts nègres », Cahiers du CRÉILAC, n°1, 査読有、2016, pp. 37-54

〔学会発表〕（計　5 件）
① Fumiaki YANAGISAWA, Rapprochement colonial(iste) par l'art et la religion en Afrique occidentale française, Colloque franco-japonais, Afrique, catholicisme, et relativisme culturel: parcours des esprits pré-modernes à l'ère laïque, 2018 年 1 月、東京大学

②柳沢　史明、『情動的感受性』――ロジャー・フライのフォーマリズムからサンゴールのヒューマニズムへ、国際シンポジウム「アフリカにおける芸術と情動」、2017 年 8 月、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

③柳沢　史明、「アフリカ美術研究のための方法」を求めて――カール・アインシュタインと「アール・ネーグル」」、日仏シンポジウム「芸術照応の魅惑 II　両大戦間期のパリ：シュルレアリスム、黒人芸術、大衆文化」、2016 年 10 月、日仏会館

④柳沢　史明、呪物と芸術―フランス人宣教師らによるアフリカ彫刻観、民族藝術学会、第 79 回東京研究例会、2015 年 12 月、立教大学

⑤柳沢　史明、アフリカ彫刻へのある親密なる愛情――F・エランス『バス・バシナ・ブル』におけるプリミティヴィスム、日本フランス語フランス文学会、2015 年度秋季大会、2015 年 11 月、京都大学

〔図書〕（計　4 件）
①柳沢　史明、水声社、〈ニグロ芸術〉の思想文化史　フランス美術界からネグリチュードへ、2018、371

②Fumiaki YANAGISAWA　他、L'Institut de recherches sur les langues et les cultures d'Asie et d'Afrique, Rapport Symposium international: Art et affect en Afrique, 2018, 16-24

③柳沢　史明　他、水声社、異貌のパリ、2017、187-202

④柳沢　史明　他、竹林舎、パリ II　近代の相克、2015, 357-379

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
日仏シンポジウム共催：（アフリカ・カトリシズム・文化相対主義：ライシテの時代におけるプレ-モダン的徴表のゆくえ）、2018 年 1 月 27 日、東京大学本郷キャンパス（発表者：国内研究者 6 名、国外研究者 2 名）
シンポジウム告知ホームページ（http://www.l.u-tokyo.ac.jp/bigaku/documents/2018_colloque_Tokyo_Affiche.pdf）

ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
柳沢　史明（YANAGISAWA Fumiaki）
東京大学・大学院人文社会系研究科　助教
研究者番号：10725732

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)